

〔染液完成〕

発酵が十分にすすむと、スクモから色素がとけだし、染液が完成する。



染液そのものは、緑がかった褐色で、藍色ではない。染液の表面には、「藍の華」とよばれる赤みがかったあわのような膜があらわれる。

④ 染色

水にひたしておいた布や糸を、固くしぼって染液につけます。しばらくして、引き上げよくしぼって空気にふれさせると青色に染まってきます。

染液につけて、しぼるという作業を何回もくり返すことで、深みのある藍色が生まれます。

藍染の製品

藍染の製品は、生活のいろいろな場面で、人々の暮らしをいろどってきました。



。祭り着

藍色の地に軍配と波模様が鮮やかに染め抜かれている。

。布団

表に花と蝶の模様が染め抜かれている。戦前までは、婚礼布団としてこのような華やかでおめでたい模様のものが作られることが多かった。



。法被

カキ料理をだすカキ船の従業員が着ていたユニフォーム。店の名前と船の絵などがあしらわれている。



あいろ 藍色が生まれるまで



糸を染める
(写真協力 深安郡神辺町 坂本恭士さん)

広島市郷土資料館

〒734-0015 広島市南区宇品御幸二丁目6番20号

TEL (082) 253-6771

FAX (082) 253-6772

藍の栽培から染色まで

化学染料の発達したいま、染色は比較的簡単に行える作業となり、機械化も進んでいます。しかし、以前は手間のかかる大変な作業でした。この手引きでは、伝統的な染色の中から藍染を取り上げ紹介します。

① 藍の栽培



藍

2、3月ごろに藍（蓼藍）の種まきをして苗を作り、春には畑に植えかえます。夏の暑い時期になると花がさきますが、その直前の梅雨明けのころに葉を収穫します。（一度収穫した後で再生してくる葉を、再び収穫することもあります。）

② スクモ作り

まず収穫した葉をきざんで乾燥させ、茎は取りのぞきます。つぎに水を加え、ムシロ（ワラで編んだ敷物）をかけて保温し、発酵させます。こうして2、3か月たつとスクモができあがります。このスクモが藍染の染液の材料となります。



スクモ

③ 染液作り（伝統的な技法）

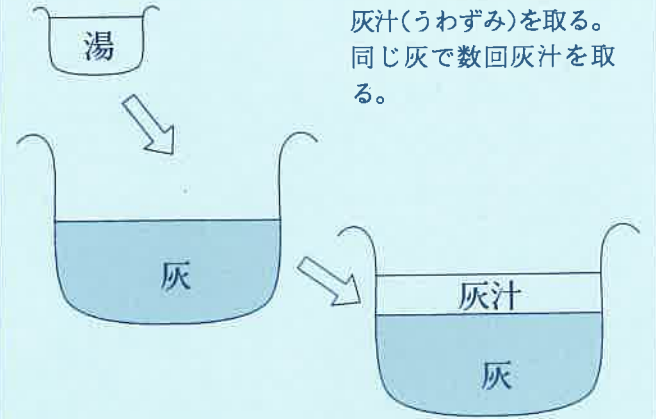
染液作りは、藍建てとよばれます。スクモを大きな藍瓶にしこみ、温度を一定にたもち、灰汁・石灰などを使って液が腐るのを防ぎながら、酒やフスマ（麦をひいて粉にするときに出る皮のくず）などを使って発酵をすすめて完成させます。

藍建てとその後の管理は、染液の色やにおいなどの、わずかな変化を読み取って行うたいへん難しい作業です。

（注）発酵とは

微生物のはたらきによって、化学変化を起こさせること。藍建てでは、発酵菌によって藍色の色素（インジゴ）がひきだされる。

〔灰汁取り〕



灰と湯を混ぜ合わせて灰汁（うわずみ）を取る。同じ灰で数回灰汁を取る。

〔しこみ〕



スクモを藍瓶に入れ、石灰、灰汁をたして十分にねり上げる。

ねったスクモに、灰汁をたして酒をふり入れて発酵をまつ。

液の表面に泡が出始めたら、さらに灰汁をたして液の量を増やす。